

第9回（令和2年度）
高石市防災シンポジウム報告書

第9回（令和2年度）高石市防災シンポジウム

“自助・共助・公助” コロナ禍の避難所生活

日時 令和2年10月20日(火) 開始 午前10時00分
終了 正午

場所 たかいし市民文化会館「アブラホール」

第一部 基調講演「人を紡ぐ・いのちを紡ぐ ― コロナ禍における避難所運営を考える ―」

講演者

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授 天野 和彦 氏

第二部 パネルディスカッション「高石市の避難所について」

コーディネーター

京都大学防災研究所教授 牧 紀男 氏

パネラー

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授 天野 和彦 氏

高石市副市長 福井 淳太

聴衆 約240人（自主防災組織、民生委員、各種団体、防災会議委員、教育保育機関、
高石防災協会加盟企業ほか）

開催にあたって

新型コロナウイルス感染症が拡大し、今も、収束したと言い切れない状況での開催となりますが、シンポジウム開催における感染症対策として、マスクの着用や入口での検温、手指消毒、座席の配置、名簿の作成などにご協力いただきまして、深く感謝を申し上げます。

昨年を振り返りますと、全国各地で地震や洪水、台風等による甚大な被害が多発しており、特に10月には台風19号が大型で強い勢力のまま伊豆半島に上陸し、関東地方を中心に大雨特別警報が発表され、また、最大瞬間風速40メートルを超える暴風により、東日本から北日本にかけての広い範囲で非常に強い風を観測し、大雨と暴風等による人的被害や、電気、水道、道路、鉄道施設などのライフラインへの被害が発生しております。

今後においても、多くの甚大な災害発生が懸念される状況となっております。

また、本年は新型コロナウイルス感染症拡大のなか、災害時においては地域の組織的な行動が大変重要であり、避難方法や、避難所運営についても早急な対応が必要となっております。

このような中、第9回となります今回の高石市防災シンポジウム、第一部の基調講演では、福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任教授の天野和彦様に、東日本大震災の2,500名を超える被災者を抱えた「ビッグパレットふくしま避難所」において、県庁運営支援チームの責任者として感染症対策を踏まえた避難所生活を作り上げられた貴重な経験をもとにご講演をいただき、第二部では、天野教授に加え、本市防災危機管理アドバイザーである京都大学防災研究所教授の牧紀男様と、元大阪府危機管理室長の福井副市長によるパネルディスカッションを行い、地域において「災害が起こった場合の事前の準備と行動計画」となる「地区防災計画」の重要性についても、議論をいたしました。

本市では、市民の皆様方と私たち行政が連携し、ともに、これまで培ってきた高いレベルの防災力を過信することなく、自助、共助、公助、すべての力を結集し、新型コロナウイルス感染症を乗り越え、より一層の防災力の向上を目指して、しっかり取り組んでゆかなければなりません。

よく「訓練でやっていない行動はできない。」と言われます。これまでと同様に、この防災シンポジウムでしっかりと勉強をしていただいて、11月5日の地震津波総合避難訓練にご参加いただきたいと思います。

これからも本市はより一層の防災のまちづくりに取り組んでまいります。市民の皆様方におかれましては、ご理解とご支援、ご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。



第一部 基調講演「人を紡ぐ・いのちを紡ぐ ― コロナ禍における避難所運営を考える ―」 約40分

○講演者

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授 天野 和彦 氏

今回の防災シンポジウムでは、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授の天野和彦様に基調講演を行っていただきました。

〈モノの防災から考え方の防災へ〉

新型コロナウイルス感染症の拡大は、すでに災害といえる。これまでのシステムが立ち行かなくなっている。水や食料などのモノの防災から、考え方の防災に切り替えないといけない。

東日本大震災から10年経ってなお大変な思いをしている人たちがいる。熊本地震も知見を活かせばすぐに収束するだろうと考えていたが、そうはなっていない。それでも今後、首都直下型地震や南海トラフ巨大地震に備えないといけない。

〈災害に強いまちとは、人と人がつながっているまち〉

東日本大震災で分かった教訓。それは「普段準備していること以上はできない」ということです。災害が起きて、いろいろなことが起きるわけではありません。地域の課題、組織の課題が浮かび上がってくるだけです。地震が発生して直後に隣の人も知らなかったのが一致団結して困難を乗り越えようとは絶対になりません。

防災のために人がつながっているわけではありません。元々人と人がつながっていて、結果防災に強いまちになります。「結果防災」。こういうまちを作ってゆきましょう。いのちは一人で守れないから。

〈いのちを守るために、交流と自治〉

東日本大震災、福島県で3千人を収容したビッグパレットふくしまという施設があります。そこで発災1か月後に人が死ぬかもしれない事態になりました。ノロウイルス感染の発生です。私は支援のために避難所運営に入りました。トイレの前に人が寝ている状態でした。医療スタッフだけではどうにもできません。居住環境を改善し、避難者に手洗いうがいを徹底してもらいました。

避難所に入ったときは、「おはよう」「こんにちは」も無かったくらいです。阪神淡路大震災の教訓から、一人ぼっちにさせないことを支援の軸にしました。回覧板を作って会議を開いたら、信頼関係が芽生えました。足湯を始めたら笑顔になりました。サロンを始めたらコーヒーを作る人が出てきて、手伝う人も出てきました。こうやって避難所に自治が生まれました。交流と自治がいのちを守るということです。

〈問われている「地域でどう生きるか」〉

被災者が発生しなかった地域の経験に対して、自分たちでやれることは自分たちでやる。そのためにはどうすればいいか。地区防災計画につながる3つのことがあります。①地域のことを知る。②過去の災害から学ぶ。③災害に関する知識を増やす。

自治会は、「自らの地域を住みよい地域にする仕組み」が大きなメリットです。個人のメリットとは違います。住民間のつながりが深い地域ほど災害に強いです。普段準備している

以上のことはできません。災害を越えていくためには「市民活動を高めること」よりほかなりません。中心は市民の皆さんなのです。

(写真) 基調講演を行う天野和彦氏



(スライド)

**【第一部】
基調講演**

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
特任教授 天野和彦 様

人を紡ぐ・いのちを紡ぐ
— コロナ禍における避難所運営を考える —

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
天野 和彦

新型コロナウイルス感染症の拡大

これは災害だ！

その理由

▼多くの命が失われていく
▼大きな経済的損失

社会システム崩壊の危機

つながりを分断する動き

墓参りなどのため東京都から青森市に帰ったある市民の生家に「何を考えてるんですか？」「さっさと帰ってください！！」など、帰省をとがめる内容の紙が投げ込まれた。

感染拡大のなかで、不安がさらに広がっている。しかし、問うべき相手はウィルスである。

つながりを深めていく動き

新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、千葉県松戸市が「人権尊重緊急宣言」を発表しました。宣言は、新型コロナウイルスの感染者や、医療・介護関係者ら、またその家族への差別や偏見、いじめに反対するものです。宣言では「差別や偏見は決して許されるものではありません」と明言し、「闘う相手は人間ではなくウィルスです」と指摘しています。【BuzzFeed Japan / 2020/8/4(火)】

今後予測されている
災害時における避難者数

※ 東日本大震災	約50万人
※ 熊本地震	約18万人
首都直下地震	約700万人
南海トラフ大地震	約950万人

この写真を見てどう感じますか？

1930年 北伊豆地震の避難所

NHK「視点・論点『人道的な避難所運営と運営』」(2018年6月25日放送)
新潟大学 特任教授 横沢和彦さんの解説の中で紹介

イタリアの避難所に被災後真っ先に届く3つのもの

イタリアで真っ先に届くのは
トイレ！おまけに広い！キレイ！車椅子対応も！

イタリアの避難所に被災後真っ先に届く3つのもの

イタリアで真っ先に届くのは
キッチンカー！アルファ米やお弁当じゃない！なんと1台で1時間に1000食！

イタリアの避難所に被災後真っ先に届く3つのもの

イタリアで真っ先に届くのは3つ目はベッド！避難所では室内でも特大テントでプライバシーもばっちり！

世界の名目GDP(USドル)ランキング

経済大国日本！
科学技術立国日本！

災害法制度の改正を！

災害援助を「権利」として捉え直す国際基準（スフィア基準）。正式な題名は「人道憲章と人道対応に関する最低基準」であり、避難者はどう扱われるべきであるかを個人の尊厳と人権保障の観点から示している。

災害とは何か・・・

日本語の「災害」は、自然現象としての「ハザード」と社会現象としての「ディザスター」。「東日本大震災」という「ディザスター」は、東北地方太平洋沖の津波対策が万全で、社会インフラの耐震性が完璧だったから、東日本大震災は起こらなかった。だから⇒巨大津波や津波避難ビル⇒「目的防災」しかし、自然現象の全てを見越した対策は不可能⇒災害は防げないが「災害に強いまち」は作れる。

▲ 災害に強いまち

- ・・・ふだん準備している以上のことはできない
- ・・・それまでの地域課題が顕在化するんだ
- ・・・人と人がつながっているまち

⇒ 防災のまちづくりだけでは住民を守れない

➡「目的防災」から「結果防災」へ

台風19号の被災地福島の状態から

下着がないという被災者からの訴え
えっ貰ってもいいんですか？
災害救助法がよくわからなかった行政職員

市民自身が学ぶ

台風19号の被災地福島の状態から

- ▲ 高齢者の避難の仕組み構築を！
- ▲ 避難所は地域の支援センターとしての役割を！
- ▲ 在宅避難者へのケアを！
- ▲ 川に様子を見に行き・・・適切な情報を！

東日本大震災の教訓は活かしたのか？

個人の記憶、教訓はあっても、それを総括し社会システムにしてこなかった。

台風19号の被災地福島の状態から

これまでの災害の教訓が活かした地域もあった

「8・5」教訓！梁川で最悪の事態を回避 自主防災組織が機能

台風19号で浸水被害が発生したものの死者はいなかった伊達市梁川地区。1986（昭和61）年に起きた「8・5水害」の教訓から町内会や自治会ごとに作られた「自主防災組織」に原則、全世帯が入る。住民らが高齢者に早期の避難を呼び掛けるなど、早い防災意識が避難の準備の助けになった。阿武隈川のほか支流の広瀬川、塩瀬川が流れる梁川地区。先月12日に上陸した台風19号では河川が氾濫、住宅に最大で高さ2メートル以上とみられる、床+410センチ、床下224センチ（14日現在）の浸水被害が発生した。犠牲者が出てもおおしくなく状況だった。市梁川総合支所の萩原孝之支所長は振り返る。避難勧告が出る前の12日昼の段階から、自主防災組織の住民や民生委員らが「災害弱者」の名簿を基に高齢者などを訪ね、夕方までの早期避難を促した。塩瀬川では委託された自主防災組織の住民らが水門を閉じ、排水作業もあった。萩原支所長は「自分たちの地域は自分たちで守るという意識があった」と地域ぐるみの取り組みを評する。

伊達市梁川 2019.11.01.6

災害を人権の視点で捉えなおす

想像力ということ・・・見方を変えろということ

支援者の仕事

最高の使命とはなにか・・・

いのちを守る

どうやって守るのか？

人と人がつながるしくみ

そのためにどうするか？

交流と自治

ビッグバレットふくしま避難所での取り組み

災害直後には3,000名の避難者で溢れた

発災から1ヵ月・・・「人が死ぬかもしれない」ノロウイルス 治安の乱れ

生命を守るためには自治活動だ！

～でもどうしたらいいのか？

- ・阪神・淡路の震災時になぜ仮設住宅で多くの孤独死が生まれたか
- ※ **交流**の場の提供と**自治**活動の促進
- ・そんな効果あるの？ーサロン（喫茶スペース）と足湯の設置

足湯の活動

サロンの活動

■ 大切なのは「自治」

でも、どうしたらいいの？

足湯とサロンから生まれた交流

↓

交流と自治を保障し続けていくために…

おだがいさまセンターの開所

生活復興の拠点
おだがいさまセンターの取り組み



仮設、借り上げ、県外避難者の生活復興の拠点

■ 避難所(地域)におけるコミュニティ形成

- ・「交流」の場の提供と「自治」活動の促進
- ・「生命を守る」活動と「生きがいと居場所づくり」の活動

↓

住民間のつながる力

↓

コミュニティ意識の醸成

これまでの自治体の災害対応を振り返ると…

「災害前には、以下のように思っていた」

- ・災害時でも、庁舎や設備、機器は使えるだろう。
- ・災害時でも、職員はそれなりに集まるだろう。
- ・災害対応は、防災・危機管理部署に任せておけばいい。
- ・立派な地域防災計画やマニュアルがあるから大丈夫。

しかし実際に災害を経験すると…

「災害対応は、想像以上に大変であった」

- ・電話、電気が全く使えなくなるとは、思っていなかった。
- ・職員が、なかなか集まらず、人手が足りなかった。
- ・防災とはあまり関係ないと考えていた私の部署が、こんなに忙しくなるとは思わなかった。
- ・何日も、食べるものもなく、家に帰れなかった。
- ・(従来型の)地域防災計画やマニュアルは、ほとんど見なかった。
- ・(従来型の)事前計画は、ほとんど役に立たなかった。

東日本大震災や熊本地震における自治体職員の対応について

被災自治体職員が主導権を持っていた

被災当事者かつ未経験

何をどうしていいかわからなかった

過去の被災自治体の応援職員に仕事を割り振ろうと思っても、被災自治体は何をどうしていいのかわからないために、罹災証明書発行、食料配布などを割り当てるなど過去の教訓を活かす場を与えられなかったケースが多かった。

↓

BCP (BCM) の必要性

「白馬村の奇跡」は奇跡だったのか？①

奇跡じゃなくて、やっぱり日ごろの備えじゃないですか。やっぱり日ごろからこういうものをききとある程度やっていると、いざというときに役に立つんですよ。フォークリフトも、災害時にはフォークリフトを使いましょうなんていうことはどこにも何もないわけなんです。

地域の情報を地域の人たちが持っているということですね。活用できる資機材もわかっているし、活用できる人材も、どこに誰がいるとか、この人に言っておけばここはとりあえず大丈夫だ、みたいな。(白馬村 堀之内区前区長・鎌倉氏インタビューより)

↓

地域のコンテンツを地域で共有

↓

地区防災計画の必要性

「白馬村の奇跡」は奇跡だったのか？②

Q 村役場として被害状況、全体の概要をつかんだというのはいくらだったのか

A 役場がつかんだのは軽でよね。朝までに、地区で地図に全部塗って来ていたんですよ。ここに、地図にクワックが入っているんだとか、この家はもうつぶれたんだとか。(白馬村 役場総務課・太田氏 インタビューより)

Q 災害前からそういう仕組みがあったんですか？

A (以前から) 行政に持っているから俺のところに持ってきてくれると。それで俺を呼んで、行政に行って、こういうことで今困っているのなんだからしてもらえないですかねという話を依頼する。(白馬村 堀之内区前区長・鎌倉氏)

A 区長さんが「俺は知らないよ」というのは役場としてやるべきではないんですよ。村長から言われたからやるのでなくて、これは区長さんが承知ですか。(白馬村 役場総務課・太田氏)

↓

地域自治と行政の深いつながり

↓

地区防災計画の必要性

「白馬村の奇跡」は奇跡だったのか？③

自治会というのは何なのというのは、やっぱり、自分たちで始めると書くと書かないですか。自分たちでやることは自分たちでやるよ。だから、助けたこともそうなんですよ。我々の中でできることはやる。それ以上に大きいものは公助に頼む、そういうことでずとやってきている。

(白馬村 堀之内区前区長・鎌倉氏インタビューより)

↓

毎年更新していた災害時住民支え合いマップ

↓

地区防災計画の必要性

地区防災計画をつくるということ

自治会が考える防災計画と居住者が考える防災計画とは必ずしも一致していない

地域居住者目線で防災計画を立て、それを市町村地域防災計画に反映する(ボトムアップという考え方)

地区防災計画を検討するうえで大事なことは、様々な立場の方が検討に参加することが重要。(男女、年齢、要援護者、事業所勤務者など) それぞれが自らの立場で発言をし、それを反映することが、地域実態に即した地区防災計画作成につながる。

※参考：みんなで作る地区防災計画(内部版) <http://www.bousai.go.jp/kyokai/shikubousai/>

↓

地区防災計画制度を成立させるためには、地域コミュニティ構築が重要

■ 地域で何をすればいいの？

- ① 地域のことを知る
- ② 過去の災害から学ぶ
- ③ 災害に関する知識を増やす

最初から完璧なものを目指す必要はありません。近隣の方が集まり、防災ゲームで楽しむ、街歩き(散策)をすることも、地区防災計画の取り組みです。

出典：「防災定例会」参加者による日本赤十字会

被災地・福島教訓

コミュニティが崩壊してしまった地域があるということ
= 人がバラバラになっているということ
= 寂しいと人は死ぬ
= さみくさせないために、交流と自治が大切

全国でも同じ課題がある！

人と人がつながるしくみを！

孤独死との闘い — 市民との協働

向こう三軒両隣の精神

▲ 東京都立川市 大山自治会

「全世帯名簿」/「孤独死ゼロ」/「創生クラブ」/「葬儀ボランティア」/「大山ママさんサポートセンター(MSC)」 → 自治会加入率100%を維持。2004年から「孤独死ゼロ」

▲ 「市能工商」で地域を創る →

「市(市員、住んでいる人が主人公となった町づくり)能(住員の能力の活用)工(創生工夫で取り組む活動)商(コミュニティビジネスを作り、住民に還元する)」

※大山自治会、1600世帯約4000人が居住する都営大山団地内の自治会

J-CASTニュース 2016年1月6日(水)

町内会って、そもそも入る必要あるのか
小栗旬・山田優夫妻「この世のトラブル」で浮かんだこと

豪邸に住んでいるらしい小栗さん一家だが…
俳優の小栗旬さん(33)と山田優さん(31)夫妻の「この世のトラブル」が週刊誌で報じられている。コトの真相はわからないが、夫妻が町内会に加入していないことに、会の役員が「残念」と述べているというのだ。

だが、加入はあくまで任意だ。入る必要性やメリットはどれほどあるのだろうか。

↓

自治(会)は、なぜ必要か

自治(会)は、なぜ必要か

いのちは一人では守れない

人間は、つながることで生きてきた。歴史が証明している！

私たち支援者の使命

**生命を延ばし
生命を強め
生命を輝かせる**

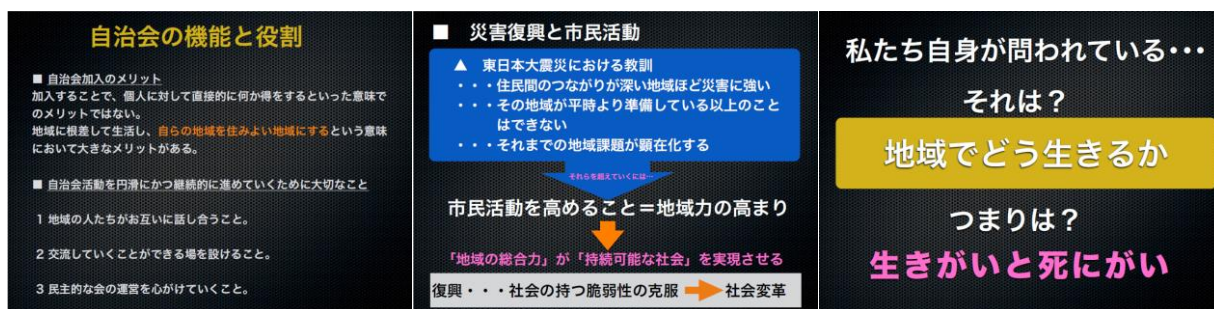
生命を輝かせるために

- ◆ 人間(ヒト)は弱いんだ
- ・弱肉強食って原理なの？(競争「原理」について)
- ・…協力と分配
- ・ヒトとチンパンジーの子育ての違い



ヒトとチンパンジー

ヒトとチンパンジーの祖先は、約600万年前に別れた。約600万年前から700万年前くらいは、人猿たちが暮らしていた。チンパンジーは、人猿の子供で、チンパンジーは「ラングムラングム」で、お母さんがお父さんと一緒に子育てをする。チンパンジーは、お母さんがお父さんと一緒に子育てをする。チンパンジーは、お母さんがお父さんと一緒に子育てをする。



第二部 パネルディスカッション「高石市の避難所について」 約 50 分

○コーディネーター

京都大学防災研究所教授 牧 紀男 氏

○パネラー

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授 天野 和彦 氏

高石市副市長 福井 淳太

第一部の基調講演を受けて、第二部でパネルディスカッションを行いました。

第二部では牧教授に司会をお務めいただき、第一部に引き続いて天野教授、そして福井副市長の3名で議論を進めました。

まず、福井副市長が本市で想定されている自然災害による各種の被害想定を改めて紹介した上で、現在、新型コロナウイルス感染症が災害時の新たな課題に挙がっていると述べました。

市が避難所で想定していることとして、自宅待機者や療養者と一般者の収容を別の階、部屋、通路で分離することや、間隔確保や間仕切り・テントの設置などの感染防止策とともに、1人当たりの必要面積が大きくなることによる収容可能数の減少に対応して、民間団体等への要請や、市民に友人親戚宅への避難を検討していただくことなどを踏まえて、天野教授の経験談を取り混ぜながら、議論を交わしました。

(写真) 第二部から登壇された牧教授・福井副市長



(スライド)

【第二部】 パネルディスカッション

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター特任教授
天野 和彦 様
高石市防災危機管理アドバイザー・京都大学防災研究所教授
【コーディネーター】 牧 紀男 様
高石市副市長 福井 淳太

危機管理の基本

- 正しく恐れる = 周りで想定される危機事象(自然災害)とは?
- 勇気を持って行動する = 命を守る
- 助け合い = 自助・共助・公助
(組織的連携) (近助=自主防災) (民助=企業)

『まさか』ではなく『もし』の発想を持つ
『先憂後楽』

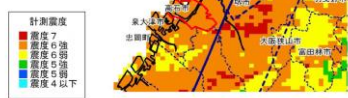
高石市で想定される災害

- ① 直下型地震 (上町断層帯, M7.8 最大震度6強)
- ②-1 海溝型地震 (南海トラフ巨大地震, M9.1 最大震度6弱 津波)
- ②-2 海溝型地震 (東南海・南海地震, M8.6 最大震度5強 津波)
- ③ 台風 (中心気圧910hPa想定, 高潮)
- ④ 大雨・洪水 (芦田川・王子川, 床下浸水(一部床上))
- ⑤ 大雨・内水 (下水道, 床下浸水(一部床上))

高石市で想定される災害

- ① 直下型地震 (上町断層帯)

マグニチュード「7.8」
最大震度6強



高石市で想定される災害

- ② 海溝型地震 (南海トラフ巨大地震)

マグニチュード「9.1」
最大震度6弱



高石市で想定される災害

- ② 海溝型地震 (南海トラフ巨大地震)

マグニチュード「9.1」
津波浸水想定区域



高石市で想定される災害

- ② 海溝型地震 (東南海・南海地震)

歴史上繰り返し確認

マグニチュード「8.6」
津波浸水想定区域



高石市で想定される災害

- ③ 台風～高潮

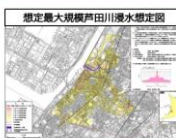
【中心気圧】日本に上陸した既往最大規模の台風である室戸台風を基本とし、910hPaで想定
【移動速度】速いほど風速が大きくなるため、潮位幅角が大きくなる。伊勢湾台風を基本とし73km/hで想定



高石市で想定される災害

- ④ 洪水 (芦田川)

「想定最大規模降雨」= 24時間総雨量1150.0mm
1時間最大雨量144.0mm



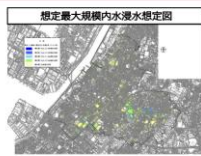
想定最大規模の降雨によっては、大規模な床下浸水(一部床上浸水)が発生する可能性。

高石市で想定される災害

⑤ 内水（下水道）

【想定最大規模降雨】＝1時間最大雨量**147.0mm**

想定最大規模の降雨によっては、床下浸水（一部床上浸水）が発生する可能性があります。



12

これまで進めてきた災害対策



13

これまで進めてきた災害対策

地震津波総合避難訓練の実施

【訓練テーマ】
第1回(H23)「津波想定訓練」
第2回(H24)「津波想定訓練 水平避難」
第3回(H25)「高石版 釜石の奇跡」
第4回(H26)「津波・直下型地震同時訓練」
第5回(H27)「自主防災組織と中学生との協働」
第6回(H28)「避難初期を想定した訓練」
第7回(H29)「物資配給を想定した訓練」
第8回(H30)「避難所自主運営につなぐ」
第9回(R1)「普段からの顔の見える関係づくり」

市民・企業・生徒・園児等の参加による
毎年1万人規模の訓練を実施

14

現在進めている災害対策

【公園高台移転】
蓮池公園整備



【避難所対策】
学校空調設備

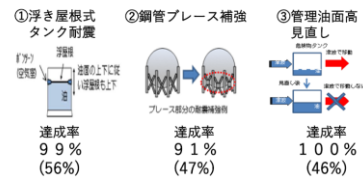


15

新たな想定最大規模の洪水、高潮、内水等の浸水想定公表にもとづき、高石市ではハザードマップと高石市地域防災計画の修正作業を進めています。



臨海企業独自の主な災害対策



※達成率はH29年度末、○はH26年度末

16

17

新たな課題

令和2年
新型コロナウイルス
感染症の拡大

令和2年
新型コロナウイルス
感染症の拡大

新たな課題

1. 避難所でコロナ感染を発生させない
2. 避難所の収容人数の解決

高石市の指定避難所は

これまでと異なるコロナ対応の避難所へ

18

19

1. 避難所でコロナ感染を発生させない

新型コロナウイルスの感染経路

自助

① 飛沫感染

避難所でもマスク着用が必要です。

② 接触感染

避難所でも手指消毒が必要です。

20

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

① 飛沫感染対策

世帯区画・通路を確保します。

【計画上の占有面積】1人当たり1.65㎡ ※約1畳分

- 【対策】
- ・1世帯を2人と想定した場合、1.8m×1.8m
 - ・1世帯が4人の場合は、3m×3m
 - ・区画の間に、1mの通路を確保

これまでの約2.4倍の場所が必要

21

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

① 飛沫感染対策

間仕切り・テント・ベッドを設置します。



22

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

① 飛沫感染対策

換気・空調設備を確保します。

窓を開放し、換気を確保。新鮮な空気を取りこむこと。

夏季は室内での熱中症の危険性？

全避難所で空調設置予定です。

23

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

② 接触感染対策

設備の消毒を徹底します。

- 取手・スイッチ
- エレベーターボタン
- トイレ

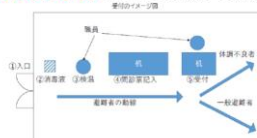
・消毒液を各所に設置し、手指消毒
・職員により定期的に消毒液を散布
または拭拭

24

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

避難所運営（受付の流れ）

避難所の受付では、手指の消毒、検温、問診表と名簿の提出をお願いします。

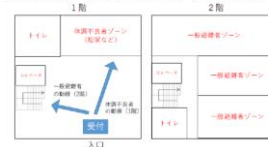


25

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

避難所運営（滞在場所）

体調不良者、一般避難者は分かれて収容。異なる階・部屋で滞在していただきます。



26

これまでと異なる
コロナ対応の避難所

☆避難者ご自身の感染対策マナー 自助

- ① ご自身のマスク・消毒液・体温計は持参しましょう。
- ② 部屋の中では、会話を控えましょう。
会話をすることは決められた場所に移動しましょう。
- ③ 避難所内をむやみに歩きまわらないようにしましょう。
特に体調不良者の場所と一般避難者の場所を往来しないようにしましょう。
- ④ 捨てたごみが感染源になることもあります。
必ずごみ袋をくくってから捨てましょう。
- ⑤ 便座やドアノブはスプレーで消毒しましょう。

27

コロナ禍でも

避難所運営マニュアル

共助

新型コロナウイルス感染症対策をいっつ、自主運営により、円滑な運営につながります。

自主防災組織が中心になり、避難者の区画調整、情報提供、物品配布、健康管理、安全管理、衛生管理を行います。

ルールを作って、避難者の公平な取り扱いと自立を守ります。

28

2. 避難所の収容人数の解決

コロナ対策を行う場合の避難所収容方法は？

○台風の場合

過去最大の避難者数 329人
平成30年台風第24号
【サーフドリーム】 【パンセ羽衣】
【とろしプラザ】 【総合体育館】

同4施設で
収容
約640人

○直下型地震の場合

想定避難者数 12,153人
上町断層帯地震

全19施設
+
学校、福祉館等
運動場の車中泊等
で収容
約14,000人

29

2. 避難所の収容人数の解決

コロナ対策を行う場合の避難所収容方法は？

○海溝型地震の場合

想定避難者数 23,087人
南海トラフ巨大地震

全19施設
+
学校、福祉館等
運動場の車中泊等
で収容
約14,000人

30

2. 避難所の収容人数の解決

民間施設の協力確保

公助

共助

高石高校



清風南海学園



羽衣学園大学



南海福祉看護
専門学校



31

(参考) 内閣府の呼びかけ

新型コロナウイルス感染症対策について、避難所運営マニュアルを参考に、避難所運営を行う際の注意点を示す。また、避難所運営マニュアルの活用について、具体的な手順を示す。

避難所運営マニュアルの活用について、具体的な手順を示す。

避難所運営マニュアルの活用について、具体的な手順を示す。

32

地区防災計画の策定に向けて

自助の限界

1人でできることには
限度がある。

自助
の力

共助

公助の限界

行政がすぐに助けられる
とは限らない。

地区防災計画が求められる。

- ・地域の課題は地域で解決する。
- ・小さく生んで大きく育てる。

33

地区防災計画の策定に向けて

自助の限界

地域で解決する。

地区防災計画

共助

公助の限界

小さく生んで
大きく育てる。

- ・地域コミュニティ主体、ボトムアップ型
自治会でも、校区でも、商店街でも可。
- ・地域防災力を高め、地域コミュニティを維持・活性化。
- ・災害時に「誰が、何を、どれだけ、どのようにすべきか」を定める。
- ・地区の被害想定をハザードマップで確認しましょう。
- ・災害時の避難方法を検討しましょう。
- ・防災訓練を実施しましょう。
- ・物資と機材を管理しましょう。

34

ご清聴ありがとうございました。

11月5日(木)

高石市地震津波総合避難訓練
マスクを着けて参加しましょう!

以上

参加者アンケート結果

1. 今回のシンポジウムでもっと聞きたいと思った部分

- ①基調講演 402
- ②自助・共助の取組 128
- ③コロナ禍の避難所運営 60

2. 災害時の自助、共助の取組について必要だと思いましたか。

- ①必要だと思う 190
- ②必要と思わない 1
- ③既に取り組んでいる 8

3. 避難の際に支援が必要な近隣の方を知っていますか。

- ①知っている 129
- ②知らない 69

4. 災害時に備え自助、共助の取組として、地区防災計画の必要性を感じましたか。

- ①必要と思う 186
- ②必要と思わない 0
- ③地区で検討(策定)している 11

5. 主なご意見

〈天野教授の講演について〉

- ・天野先生のお話が分かりやすく参加してよかった。
- ・天野先生のお話の続きを聞きたい。
- ・天野先生の福島の実例は大いに参考になった。
- ・基調講演がわかりやすくとても興味深かった。
- ・天野氏の講演は「ありがたい」と重みを感じました。
- ・天野氏の話で地域防災、一人ひとりの自治が大切、生きがいと居場所。これからの自治会活動に力が入り感銘を受けた。
- ・人の交流が命を守ることがあらためて確認できた。
- ・避難所についての考え方がイタリアと差があり今後できる事から備えていく必要を感じた。
- ・天野先生の「生きがい死にがい」印象に残りました。日頃の人とのつながりに気を配る事の重要性を認識した。
- ・天野先生の言われた地域力、生きがいと死にがい等、胸に来るお言葉がたくさんありました。
- ・天野さんのお話は「地域の活動」と「防災という課題」ときわめて具体的に過去の災害への対処が学べる。総合的にむすびつけてを提起していただく理論と実際、過去と現在をつらぬく太いご提起でした。
- ・「ふるさとのことはふるさとにいるみなさまが決める」非常に感銘を受けた。この言葉は防災におけるすべてのことに通じます。
- ・天野先生の話はとてもわかりやすくまた多くのことに同感しました。感銘を受けた。また機会があれば話を聞きたい。
- ・いいお話でした。ためになりました。天野先生のお話は興味をもってなるほどと思いなが

らきけて勉強になりました。またお聞きしたいと思いました。

- ・「普段準備している以上の事はできない」わかっているけど行動に移すことは何から手をつけていくのか理解していない。

〈地域住民の活動について〉

- ・地域のつながりの大切さがわかった。自治会のメリットがわかりやすく理解できた。
- ・基調講演で講師が言われた自治会加入のメリットは個人の利益の為にでなく、自分たち地域を住みよい町にするの言葉は印象に残った。
- ・自治会に加入しない人が各地域にいと聞きます。あらためて自治会活動の必要性を感じました。皆さんに入って貰いたいものです。
- ・防災に於いて自治会活動重要性を改めて認識することができた。大変有意義であった。早速地区防災計画に向けて取り組んでいきたい。
- ・地域に応じた計画が必要だと思う。主体は地域で公で協力援助してもらいたい
- ・各地区に応じたシミュレーションを至急作ってほしい。9年間もシンポを開催しているが各地区に応じた資料が全然無いように見る。私の地区のマンホールの位置ブロック塀の位置がわかる地図を作してほしい。
- ・皆が自治の意味をまず知ることから、防災につながると思います。
- ・地域も新しい家がどんどんすき間なく建っていますが、若い方で自治会に入る方が少なく困っています。避難所へ行かなくてはならない事があっても「あなた誰？」という事になります。
- ・自治会のあり方、説明をしても自分自身の事だけを考えて入ってくれない。難しい。
- ・自治会と市役所の打合せが非常に少ない。市役所所員が全員会開の天野先生の講話内容を知りつくしているのか。危機管理課だけでは不十分。危機管理課はまず市役所内で全員に天野先生の講話談を伝えるべき!!その後各自治会と頻繁に打合せすること。
- ・何事にも参加することと思う。(自治会の活動など)
- ・地域性が大切で人が人を救えと常に思ってる。
- ・自治会に加入することがいかに大切かわかった。入ってない人に伝えたい。
- ・地域を良くするために自治会を盛り上げようと思った。
- ・生きがいと死にがいを感ぜられる「まち」にしていきたいとおもいますので、行政の支援をお願いします。
- ・地域が繋がることの大切さを痛感した。一人一人の防災意識を持つことの大切さ。自治会間の交流を深めることの重要性。
- ・人と人とのつながり、地域のつながりの大切さと、いざという時に準備以上の事は出来ないこと勉強になった。
- ・住み良い地域を作るのは自分たちなんだと改めて思いました。
- ・地域の交流そして自治が大切な事が良くわかった。
- ・改めて地域の防災に対する取組の重要性を感じた。福島における避難所の自治についてとても参考となった。地区防災計画作成促進の内容は非常に参考になった。
- ・若者との協力参加を進めることが必要と思われたが、どんな取り組みがあるのか？
- ・普段家族中心に考えていた防災を地域に目を向けて考えようと思う。

- 死にがいのある生活のために日々活動していきたい。
- 人と人のつながり大切さ市民活動を高めること生命を守る活動。
- 自治会の重要性に関しては納得できたが地域（自治会）の名簿作成は個人情報が入るさくになって作れないのが現状である。
- 地域を住み良い場所にしていくために、市民活動を高めていくためにも、自治会への加入率を上げる必要がある。
- 排除される人とする人が出るだろう。予想される宗教、地域、人権対立及び村八分的な状況が生じる為、それをうまく運用できる人を育成することも大切だと思われるが、結果として状況からそういう人が生まれるのだと思われた。
- 今回コロナ禍での避難生活をどのように乗り越えれば良いのか不安ですが、人とのつながりを大切に地域で考えていきたいと思います。
- 日常に変化が無い事に油断があってはならない反省をした。準備した事しか出来ない。
- お話勉強になった。人と人とのコミュニケーションが大切だと思いました。

〈その他〉

- ウイルス感染状態の中での避難対策の必要性。ディスカッションでもっと天野先生の話が聞きたかった。
- 公助の取組みを知りたいと思う。
- パネルディスカッションでは避難所の環境作りについて伝えてくださってますが、避難所に行けば安心と逆に油断して自身で備えない人も多くいると思います。もっと自助の意識を高めるお話をしっかり伝えてほしいと思います。